

調査報告

ロマンス言語学の論点—ある調査報告より (4)

Aspetti problematici della linguistica romanza

A proposito di alcune recenti indagini (4)

菅田 茂 昭

Shigeaki SUGETA

1. コルシカ語の母音体系とそのロマンス語における位置づけ

コルシカ島ではこんにち公用語としてのフランス語のかたわらで地域語としてのコルシカ語が話され、コルシカ語の入門テキスト、辞典などがかなり出版されている。しかしロマンス語におけるその位置づけについては Diez, Ascoli いろいろ多くの学者が論じているが一致した見解には至っていないのが現状である。起源におけるサルジニア語との共通性、傍層語としてのトスカーナ方言の影響、孤立的な中南イタリア方言群との関連などが島の方言分布ともからんでいることに加え、コルシカ語としての特異な現象もみられるからである。

まずコルシカ語がこれまでどのように位置づけられてきたかを簡単にたどってみよう。ロマンス言語学を確立した Diez(1836-1843)はすでにコルシカの方言をトスカーナ方言を含む中部イタリア方言群に組み入れている。Ascoli(1882-1885)もトスカーナ方言型からずれるが、トスカーナ方言とともにイタリア方言の一種と見做す。Meyer-Lübke(1890-1906)ではコルシカ語が北部のサルジニア方言に関連づけられるが、サルジニア語はイタリア方言とは独立した位置を与えられている。この考えは Lausberg(1976²:78)に受け継がれているが、《I dialetti della Corsica, in origine, hanno avuto affinità col sardo comune, ma, per il dominio pisano, sono poi stati toscanizzati in tal misura che sono ormai quasi da considerarsi dialetti italiani.》と述べ、起源においてサルジニア語との類縁性を認めながらも、トスカーナ語化によりイタリア方言と見做し得るとしている。コルシカ方言をトスカーナ型とする Diez 以来の伝統的な分類は、コルシカの言語地図 ALEIC(1933-1942)で知られる Bottigliani の《una terra toscana》なることばをはじめ、Bertoni(1940)、コルシカ出身のフランス人捕虜との出会いについて語る Rohlf's(1941)、Tagliavini(第5版 1969)などを経て最新のロマンス語概論を残した Allières(2001)に至っている。ことに Melillo(1977)に南イタリア方言群との類似の指摘があるほか、Merlo(1924)がラディン語、サルジニア語と並んでコルシカ語もイタリア方言の外に置いたことが注目に値する。

コルシカ語と呼ばれても、サルジニア語の場合と同様に標準語が確立している訳ではなく、諸方言の総称に過ぎない。コルシカは地勢・行政的な条件を考慮すれば北東部と南西部に2分されるが、方言はおおまかに Bastia から中部を含む中・北部方言と Sartène を中心とする南部方言とに分けられるが、中・北部方言がコルシカ語を代表し、このうち、トスカーナ語化の著しいのはことに北東部である。南部方言は東側の Porto-Vecchio の北から Rizzanese 河の上流に向かい、河沿いに西に下る線から南の保守的でアルカイックな地域である。中・北部方言のうち、ことに Tavaro 流域を含む中部方言を独立して扱う場合は東側の Orbu 河から Ghisoni を結び、Gravona 河を西に下る線と南部方言が始まる線との中間地帯を指している。

ここではトスカーナ方言の影響が多くの学者に一致して指摘されながらも特異な現象もみられることに着目し、コルシカ語の自立性を認識する第一歩としたい。

コルシカ語の特質として最初に注目されるのはその母音体系である。ラテン語の強勢の Ī と Ū の変化をみると、Ī と Ū がそれぞれ i, u のままに残る地域と ε, ɔ (正書法には反するが以下便宜上音声記号を借りて区別することにする) となる地域にコルシカ島が2分される。Ī と Ū は本来はサルジニア語と同様それぞれ Ē, Ō とは融合せず、単に Ī, Ū との長短の区別を消失したと考えられるが(島の南端部にその跡が残る)、島の大半を占める中・北部ではトスカーナ語の影響のもとに Ē, Ō と融合し、その結果が予想される e, o ではなく、ε, ɔ であること、逆に Ē, Ō の方がそれぞれ e, o に変わっていることに驚かざるを得ない。さらに興味深い現象として、南部寄りの Tavaro 流域では Ī, Ū が Ē, Ō と融合しないまま、独自に ε, ɔ に変化していることが近年明らかになっている。以下のような表にまとめることができる。

	中・北部	(Tavaro)	南部
Ī	i	i	i
Ī	ε	ε	
Ē	e	e	e
Ē			
Ā	a	a	a
Ā			

	中・北部	(Tavaro)	南部
Ū	u	u	u
Ū	ɔ	ɔ	
Ō	o	o	o
Ō			

FĪLU >	filu	filu	filu	「糸」
NĪVE >	neve	neve	nivi	「雪」
ACĒTU >	acetu	acetu	acetu	「酔」
PĒDE >	pede	pedi	pedi	「足」
NĀSU >	nasu	nasu	nasu	「鼻」
CĀPUT >	capu	capu	capu	「頭」

LŪNA	>	luna	luna	luna	「月」
GŪLA	>	gola	gola	gula	「口」
SŌlu	>	solu	solu	solu	「単独の」
FŌCU	>	fogu	fogu	focu	「火」

*例はすべて開音部に限られている。

Tavaro 流域は開口度の狭い方の母音は中・北部、開口度の広い方の母音は南部方言に近いことが分かる。なお、e と ε、o と ɔ の最小対立ペアは標準イタリア語と同じくごく僅かに過ぎない。イタリア語で pesca 「漁」と対立する pesca 「モモ」(＜PĒRSICA) が全域において ě > e であるコルシカ語で pesca であるのには(念のため「魚」の方は pesce あるいは pesciu である)トスカーナ語の影響を考慮することができる。また Ī の結果に関しても島の中・北部の freddu 「寒い」、pera 「梨」に対して南部では fritu, pira であることに注目しておきたい。

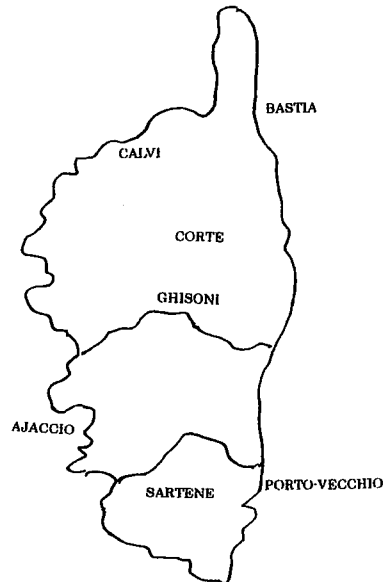
次に無強勢の母音は、南部では a, i, u のみである。北部ではこれに e と o が加わる。Corsica 「コルシカ」では無強勢の i と a は島全域で共通に起こるが、onore 「名誉」の場合は無強勢の o と e が北部でのみ可能、3種類の母音からなる南部では anori または unori となり、南北の交差する中部地域においては unore, onori なる形がみられる。したがって北部の continentale 「大陸の」、Europa 「ヨーロッパ」が、南部では cuntinintali, Auropa である。結果的に語末の無強勢の母音 u の存在は、これを欠くトスカーナ方言との大きな違いとなっている。J. Allières の概説書(2001)においてもコルシカ語についての記述があり、母音体系の項でイタリア語の語末の -o に対する -u の存在をとり上げている。トスカーナ型の2重母音化の欠如もコルシカ語の特質のひとつに加えることができる。

さらに興味ある事象として子音の前での er > ar があり、本来は全域に広まっていたと考えられるが、こんどはトスカーナ型の北部と中・南部とが対立する。

例、terra : tarra 「土地」; serpente : sarpente 「へび」; persona : parsona 「人」

鼻母音も観察されるが、こんにちではフランス語の影響は否定できないが、その起源に関しては賛否両論がある。

なお北部、中部、南部への方言の3分化は子音に関しても適用され、母音間の P, T, C の有声化、ベタシズムなどもこれらの事象のある・なしで北部と南部が対立し、中部は交差地域となっていることを付け加えておきたい。



文法事象に簡単に触れると、基本的にはイタリア(トスカーナ)型といえる。omu dice (フランス語の on dit に相当する)はフランス語の影響と言うより、イタリア語の古い層を反映すると考える方が妥当であろう。語彙に関し、cane「犬」に対して中・南部の ghjăcaru がある。サルジニアの北部とも繋がり、バスク、ギリシャ、イベリア、北アメリカにわたる基層の可能性のほか、ラテン語 IACERE「寝そべる」を想起させるとも言われている。

なお、音体系の地域差が文法事象にかかわる 1 例として、中・北部の名詞 pane(「パン」の単数)と pani(その複数)の区別は無強勢母音として 3 種類の a, i, u しか持たない南部では冠詞 u, i により示される。また南部では中・北部における ebbi(「持つ」の遠過去、1 人称・単数)と ebbe(その 3 人称・単数)の区別が、ともに ebbi であるのは興味深い。

コルシカ語の特殊な母音体系は、新しい独立したロマンス語(その存在理由として文学語の確立を挙げる学者もあるが)の誕生を告げるものとすることができよう。

2. ダルマティア語の母音体系

ルカーニアにはサルジニア語の母音体系に関連づけられるアルカイックな母音体系とともに左右非対称の、すなわち前方母音はイタリア語型、後方母音のみをサルジニア語型とする母音体系があり、後者を継承するかにみえるルーマニア語の母音体系との間に、G. Bonfante が指摘するように、ダルマティア語(1898 年消滅)の母音体系の存在が見逃せないことに 2 重母音にも触れながら着目したい。

サルジニア語はラテン語の音量の対立を消失したものの、主要ロマンス諸語におけるように Ī と Ū がそれぞれ Ē と Ō との融合に至らなかったことを重要な特質のひとつとしているが、カラブリアに接する南ルカーニアにもこれと同じタイプの母音体系が存在することが知られ、発見した学者の名前で“Lausberg 区”と呼ばれている。報告者はかつて確認のためティレニア海に臨む Maratea を訪れたことがある。例えば NĪVE > nive「雪」、MĒ(N)SE > mēsə「(暦の)月」; NŪCE > nuce「クルミ」、NEPŌTE > nepotə「孫」といった具合である。

しかしながらこの地域のアルカイックな母音体系については、メタフォニー現象とも絡みサルジニア語の母音体系に完全に一致するものではなく、むしろサルジニア語よりもイタリア語に歩み寄った段階を示すと考えられることを指摘するに留め、ここでは東ルカーニアの、しばしばルーマニア語の母音体系との類縁性が問われる、左右非対称型の母音体系を出発点としたい。

まず東ルカーニア方言とルーマニア語の例(Ā, Ă の場合は除く。例は Lausberg (1976²: 204-205)から、一部に閉音節の場合を含む)を比較してみたい。

東ルカーニア方言：

FĪLU > filu 「糸」

NĪVE > neve 「雪」

LŪNA > luna 「月」

NŪCE > nuce 「クルミ」

MĒ(N)SE > mese 「(曆の)月」

SŌLE > sole 「太陽」

PĒDE > pede 「足」

ŌCTO > otto 「8」

ルーマニア語：

FĪLU > fil 「糸」

LŪNA > lună 「月」

VĪRDE > verde 「緑の」

CRŪCE > cruce 「十字架」

STĒLLA > stele 「星」

NŌDU > nod 「結び目」

FĒRRU > fier 「鉄」

LŌCU > loc 「場所」

比較のためにダルマチア語(Veglia)の場合を掲げてみる(例は Bartoli 1906 に基づく Tagliavini(1969:375-376)、Bonfante (1999:11-12)から)。

DĪCO > daik 「私は言う」

MĪLLE > mel 「千の」

PĪRA > paira 「梨」

BASĪLICA > basalca 「大聖堂」

SĒTA > saita 「絹」

DIRĒCTU > drat 「真直ぐな」

DĒCE > dic 「10」

FĒRRU > fyar 「鉄」(cfr. ルーマニア語 fier)

LŪNA > loina 「月」

EXSŪCTU > sot 「吸われた」

CRŪCE > crauc 「十字架」

BŪCCA > buk 「口」

NEPŌTE > nepaut 「孫」

*SŌMNU > samno 「眠り」

LŌCU > luk 「場所」

NŌCTE > nuat 「夜」(cfr. ルーマニア語 noapte)

次のような表で示すことができる。

(開音節) (閉音節)

Ī > ai e

Ī > ai a

Ē > ai a

Ē > i ya

Ū > oi o

Ū > au u

Ō > au a

Ō > u ua

ルーマニア語の母音体系との類似性が直ちに認められるが、ルーマニア語で融合した ō と ō̄ がここでは依然区別されている。Bonfante(1999:12)が述べているように、およそ1世紀後に征服されたダキアにおけるよりも古い層が保存されていると見る事が可能である。ロマンス語にはサルジニア型とルーマニア(東ルカーニアを含む)型とイタリア(ト

スカーナ)型との三つの母音体系が大きく区別される。ルーマニア型はサルジニア型とイタリア型の間段階と解釈されるが、ダルマチア語の母音体系は、強弱アクセントの優勢化によりラテン語の音量の区別を消失した後も、その区別の痕跡を留めている点においてルーマニア型の前段階を示すものと考えることができよう。2重母音化(経験した2重母音を退化させたところもある)がĒ, ōのみでなくĒ, ōにも起こることはしばしばみられることであるが、ことにĪ, Ūにまで及んでいるのは注目に値する。このダルマチア型の2重母音化に富む母音体系は、東ルカーニアからパリーを通り、アドリア海に沿ってダルマチアに至る地域に広がる現象と説く学者に Mancarella があることも申し添えておきたい。

3. さいごに

ロマンス言語学は言語学が誕生してからこんにちまですでに 200 年を数え、その歴史の上に立っている。他の語派に比べてとくに過去の資料に恵まれ、歴史比較言語学の方法論的モデルとしての重要な役割も果たして来た。こんにちでは主要言語に片寄らず、地域言語にもアプローチすることでより多くの成果が期待されている。21 世紀に入って出た、これまでの研究成果を反映するかのごとき 2 つの刊行物に注目しておきたい。ひとつは 2001 年に出版された、J. Allières (1927-2000) の *Manuel de linguistique romane*, Paris, Champion である。コルシカ語など地域ロマンス語への広範な配慮がみられ、言語地理学に支えられた、ユニークなロマンス言語学の概説書と言える。著者はガスコーニュ方言、バスク語の研究で知られ、講演のため来日されたこともある。もうひとつは 1988 年に刊行開始され、17 年を費やして 2005 年秋完結した 8 巻 12 冊からなる G. Holtus ほか編の *Lexikon der Romanistischen Linguistik* (=LRL), Tübingen, Niemeyer である。まさに 2 世紀にわたるロマンス語研究の国際的な集大成としてこの出版を心から喜びたい。

付記 以上の調査研究にあたり、科研費及び早稲田大学特定課題研究助成費をいただいたことに感謝します。

参考文献

- Allières, Jacques, 2001, *Manuel de linguistique romane*, Paris, Champion.
Ascoli, Graziadio Isaia, 1882-1885, *L'Italia dialettale*. 《Archivio glottologico italiano 8》.
Bertoni, Giulio, 1940, *Profilo linguistico d'Italia*, Modena, Società Tipografica Modenese.
Bonfante, Giuliano, 1999, *The Origin of the Romance Languages — Stages in the Development of Latin*, Heidelberg, C. Winter.

- Bottiglioni, Gino, 1933-1944, *Atlante linguistico-etnografico italiano della Corsica*(=ALEIC), Pisa, «L' Italia Dialettale».
- Ceccaldi, Mathieu, *Dictionnaire corse-français*, 1988, Paris, Klincksieck.
- Comiti, Jean-Marie, 1996, *A pratica è a grammatica*, Ajaccio, Cynos et Méditerranée.
- Culioli, Antoine Louis-Gabriel Xavier, 1997, *Dictionnaire français-corse corsu-francese*, Ajaccio, DCL.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José, 1997, *Corsica*. In : M. Maiden and M. Parry (ed.), *The Dialects of Italy*, London, Routledge.
- Devoto, Giacomo, 1974, *Il linguaggio d'Italia*, Milano, Rizzoli.
- Diez, Friedrich, 1836-1843, *Grammatik der romanischen Sprachen*, Bonn, Weber.
- Falcucci, Franco Domenico, 1915, *Vocabolario dei dialetti, geografia e costumi della Corsica*, Cagliari.
- Filippini, Anton Francescu, 1999, *Vocabulariu Còrsu-Italianu-Francese*, Bastia, Anima Corsa.
- Gendre, Renato (a c.), 1987, *Scritti scelti di Giuliano Bonfante: II Latino e romanzo*, Torino, Orso.
- Guarnerio, P. E., 1905, *Il sardo e il còrsu in una nuova classificazione delle lingue romanze*, « Archivio glottologico italiano 16 ».
- Holtus, Günter et. al. (ed.), 1988-2005, *Lexikon der Romanistischen Linguistik* (=LRL), Tübingen, Niemeyer.
- Lausberg, Heinrich, 1976², *Linguistica romanza I. Fonetica*, Milano, Feltrinelli.
- Mancarella, P. Giovan Battista, 1987, *Frangimento vocalico nel dalmatico e nei dialetti dell'Italia meridionale*. In : Festschrift für Z. Muljačić. *Romania et Slavia adriatica*, Hamburg.
- Melillo, Armistizio Matteo, 1977, *Corsica* (Profilo dei dialetti italiani 21), Pisa, Pacini.
- Merlo, Clemente, 1924, *L'Italia dialettale*. « L' Italia dialettale 1 ».
- Meyer-Lübke, Wilhelm, 1890-1906, *Grammaire des langues romanes*, Paris, Welter.
- Nesi, Annalisa, 1988, *Korsisch : Interne Sprachgeschichte*. In : LRL Vol. IV.
- Rohlf, Gerhard, 1941, *L'italianità linguistica della Corsica*, Wien, Anton Schroll.
- Romani, Gilbert, 1996, *Grammaire corse pour le collège et l'école*, Borgo, Méditerranée.
- Tagliavini, Carlo, 1969⁵, *Le origini delle lingue neolatine*, Bologna, Patron.